

2018.5.17
vol.66

シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画
を
読む

本日の上映作品『4分間のピアニスト』



類いまれなピアノの才能を持ちながら殺人犯として収監され、刑務所の中でも手のつけられない問題児となった女囚と、彼女の才能に惚れ込み残り少ない人生を懸ける老教師、そんな2人の女性の魂のぶつかり合いを衝撃的に描く。来るべきコンクールでの優勝を目指し、厳しくも情熱をもって指導に当たるトラウデに、ジェニーも次第に心を開き始めるのだったが…。

監督・脚本：クリス・クラウス

音楽：アネッテ・フォックス

出演：モニカ・ブライトロイ

ハンナー・ヘルツシュプルンク

スヴェン・ピッピッチ

製作：2006年 ドイツ カラー 115分

『映画果てしなきベスト・テン』	山田 宏一／著	草思社	778.04
『アROUND・ザ・ムービー』	森 卓也／著	平凡社	778.04
『石川三千花の勝手にシネマ・フィーバー』	石川 三千花／著	文藝春秋	778.04
『映画を観ながらあれこれ思う』	西村 玲子／著	文化出版局	778.04
『チ映画を見ればわかること3』時代劇のベートーヴェン	川本 三郎／著	キネマ旬報社	778.04
『映画から見える世界』観なくても楽しめる、ちづこ流シネマガイド	上野 千鶴子／著	第三書館	778.04
『シネマ処方箋』精神科医がすすめる、こころにスーッと効く映画	高橋 祥友／著	梧桐書院	778.04
『映画でみつけた素敵なことば』	岡田 喜一郎／著	佼成出版社	778.04
『シネコン 111 吉野朔実のシネマガイド』	吉野 朔実／著	エクスナレッジ	778.2
『映画みたいに暮らしたい!』 エッセ・シネマトグラフィック・フェミナン	川口 恵子／著	彩流社	778.2
『「おもしろい」映画と「つまらない」映画の見分け方』	沼田 やすひろ／著	キネマ旬報社	778.04
『映画はあなたのナビゲーター』	森本 康治／著	文芸社	778.2

コラム『4分間のピアニスト』

“下劣な音楽は禁止よ！”vs“これが私の音楽！”

K.M.

お互いの過去にトラウマを持つ二人の魂がぶつかり合い、“生きる意味”を問いかけたものすごいストーリーでした。まさしく魂を揺さぶられる作品ではありませんでしたが、「ハッピー・エンド」好きの私にとっては、かなりシンドイ作品でもありました。随所にちりばめられたピアノの美しい演奏に癒されるということはあったのですが、暴力描写や、恨み・辛み・嫉妬といった負の感情のオンパレードで、なかなか主人公に感情移入しにくくて……。

しかし、観終わった後は、エキセントリックで無理やり感のある登場人物たちの挙動や、過去のエピソードもすべて、ラスト4分間の演奏のための伏線だと思えば許されるのかと思えてきたのも事実です。それ程、ドイツ・オペラ座でのラストシーン、クライマックスの“4分間だけの演奏”は素晴らしかったのです（こここのところのネタばれ、ゴメンなさい）。

徹頭徹尾抑え込まれていた自分の人生に対する怒りを、全て吐き出すようなジェニーの演奏。そして、割れんばかりのスタンディング・オベーションの中での、彼女が生まれて初めてする、深々とした丁寧なお辞儀！「鉄の女」のようなクリューガー先生が、思わず見せる涙と微笑み！それまで、どうしても妥協できなかった二人が互いを受け入れたことを暗示するシーンは、葛藤・混沌・矛盾・相克・憤り・怒り・やり場のなさ・反抗心などを超越する内包力と開放力、そして癒し力を持つ“芸術（特に音楽）の素晴らしさ”を実感させるシーンでした。

クリューガー先生を演じたのは、ウィーン生まれのドイツの名女優モニカ・ブライトロイ。彼女はこの作品で2007年ドイツ映画祭主演女優賞を受賞し、その3年後に病死しました（享年65才）。ジェニーを演じたのは、オーディションで1,200人から選ばれた、ハンブルグ生まれの新進女優ハンナー・ヘルツシュプルング。ピアノ演奏の演

技は、撮影前6ヶ月で猛特訓したとか……。彼女はその後も活躍中で、2016年度の東京国際映画祭でグランプリ賞とWOWOW賞をダブル受賞した『ブルーム・オブ・イェスタディ』にも出演しています。

それにしても、「ラストの演奏は、いったい誰が？」と、私の調べグセが頭をもたげて、調べてみました。初めの内はなかなか見つからなかったのですが、「あの演奏は日本人らしいよ」という刺激的なユーザーレビューを見つけ、これを手掛かりに、この作品のDVDの長いエンディング・ロール中の名前を丹念に読み取っていくと、見付かったのです。日本人かもしれないと思わせる名前が！それも二人！「KAE SHIRATI」と「KYOSI SAWAMI」。

更にネット検索を重ねて、あの驚愕の4分間の幕裏の演奏者は、ルクセンブルグを拠点にドイツ・イタリア・スペインなどで活躍されていた日本人ピアニスト「KAE SHIRATI＝白木加絵さん」であったことがわかりました。白木さんは、ジェニーを演じたハンナー・ヘルツシュプルングのピアノ演奏の演技指導も行い、サントラもCD化されているそうです。また、この作品の感動のラストシーンは、YouTubeで見られることなどが分かってきました。

そして、もう一人浮かび上がった「KYOSI SAWAMI」は、ドイツを中心に活躍されていた日本人ピアニスト「木吉佐和美さん」で、この作品の中で何度も演奏され、テーマ曲的な役割を果たしている、可憐で優しい感じの「シューベルトの『即興曲 作品142の2変イ長調』」の演奏者でした。シューベルトのこの曲は、往年の名ピアニストのバックハウス（1884～1969）が、死の1週間前の演奏会の最後に演奏した曲で、そのドラマチックな一部始終がポリドールから『バックハウス：最後の演奏会』としてCD化されています。

4/19 『小犬をつれた貴婦人』の感想

- ・結構、純愛ものでした。現代だと「破滅」するまで、愛は燃え上がるのですが、ある意味では「大人の恋愛」ということでしょうか。こういう心の葛藤を表す映画が減りましたね。物悲しくもありましたが、心は満たされました。
- ・ラストが悲しかったです。先の見えない二人の恋はどうしようもなく悲しい。「不倫は悪だ」の一言では片付けられない。原作を読んでみます。
- ・女優さんが小柄で美しく切ない映画でした。

- ・描写がとても美しかった。とても悲しい別れだが、会えることを信じることに感動し、なかなかよい映画でした。
- ・ソ連時代の白黒映画の至宝。現代社会では考えられない。これからはこのようなストーリーの映画は製作できないと思える情感たっぷりの名画です。
- ・チェーホフの文学的な言葉が胸に迫ってきました！二人の切なさが良く伝わって良かったです。
- ・「毎日が、牢屋にいるようだ」と言うことばが胸にひびいた。素晴らしい恋愛ですね。

- ・厳しい環境や運命にひたすら耐え続けるロシアの人々の心情が伝わってきました。
- ・どのような展開になっていくかとおもしろかったです。貴婦人の生活がわかりました。
- ・未来の無い恋は信じられない。生かされていると思うけれど、泥の中のチョウザメでも生きている。
- ・満たされた生活ができているからできることで、生活に一生けんめいになってないから充実していない？
- ・素晴らしい映画でした。あんな出会いを今一度したいですね。
- ・人生に一度の恋があったらいいかなあ。
- ・ステキなラブストーリー。夢かな？
- ・子供の頃の映画を観ることができました。昔の映画ですね。それなりによかったです。
- ・なんと結論が出ないままの未消化の終わり方。二人はあれからどうなるのでしょうか？
- ・よくわからなかった。結末が意外であった。
- ・終わり方が、切なすぎます。
- ・エンドが印象的で
- ・仕事帰りに映画を見ることは久しぶりです。とてもよい時を過ごさせていただきました。ありがとうございました。明日が来ることを祈ります。

- ・久しぶりに映画を観ました。また次回も来ます。
- ・久しぶりに楽しみました。ありがとうございました。
- ・いつも有難うございます。楽しみにしています。
- ・大変よかったですよ。
- ・上映途中かなり遅く最後列に来る人、ケイタイ画面をひからせる人、とても迷惑です。後から来る人は前列に座ってもらえませんか。

ご協力お願いいたします。

- ・リクエスト（多分ないかも）題『イエスタデー』カナダ映画だったと思う。テニスプレーヤー ビンセント・ヴァン・パタンがアイスホッケー選手になり、死を待つ恋人のために試合に走る姿が当時の自分に重なり、思い出深い。40年以上も前。

1979年公開の映画ですね。DVD化はされていないようですが、一部YouTubeで見られるようです。

- ・若い時に観た感動の名画を中心にやってほしい。

上映できる作品と予算は限られていますが、皆様に楽しんでいただける作品を選んでいきます。



注意



上映中の携帯操作は、周りの方の迷惑になりますのでご遠慮下さい。また、観賞マナーを守り、終了後も明るくなるまで席を立たないようお願いします。上映開始時間を過ぎての入場は、ご遠慮ください。

サロン・ド・シネマについて

6月～9月は、ホワイエが大変暑くなるため、サロンの開催をお休みさせていただいています。水分の補給等、各自でお願いいたします。

りぶらホールにはヒアリンググループが設置されています。補聴器を利用されている方は、Tモードに切り替えてください。



今後の上映のご案内（上映作品は変更になる場合があります。）

第 67 回	6 月 21 日 (木)	『踊らん哉』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:30 ~
第 68 回	8 月 23 日 (木)	『この世界の片隅に』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:15 ~
第 69 回	9 月 20 日 (木)	『市民ケーン』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:30 ~
第 70 回	10 月 18 日 (木)	『マンハッタンの哀愁』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:30 ~
第 71 回	12 月 20 日 (木)	『女だけの都』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:30 ~
第 72 回	1 月 17 日 (木)	『私の頭の中の消しゴム』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:30 ~
第 73 回	2 月 21 日 (木)	『チャップリンミュージュアル社時代 1』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:15 ~

第 67 回上映会のご案内

第 68 回上映会のご案内

踊らん哉

SHALL WE DANCE ?

字幕上映



この世界の片隅に

VIER MINUTEN FOUR MINUTES

字幕上映



6月21日 (木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

フレッド・アステア & ジンジャー・ロジャースの洗練された史上最高のダンスを堪能できるミュージカル。偽装結婚したカップルがケンカと誤解を繰り返しながらも次第に結ばれていく様を描く。8曲あるミュージカル・ナンバーはいずれも甲乙付け難いが、特にアカデミー賞にノミネイトされた『They Can't Take That Away From Me』とタイトルナンバーの『Shall We Dance』は中でも傑出している。

監督：マーク・サンドリッチ

音楽：ジョージ・ガーシュウィン

出演：フレッド・アステア

ジンジャー・ロジャース

エドワード・エヴェレット・ホートン

製作：1937年 アメリカ モノクロ 108分

8月23日 (木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:15 ~

1944年(昭和19年)2月。絵を描くことが好きな18歳のすずは、急に縁談話が持ち上がり、あれよあれよという間に広島市から海軍の街・呉に嫁にやってくる。彼女を待っていた夫・北條周作は海軍で働く文官で、幼い頃に出会ったすずのことが忘れられずにいたという一途で優しい人だった。こうして北條家に温かく迎えられたすずは、見知らぬ土地での生活に戸惑いつつも、健気に嫁としての仕事をこなしていく。

監督・脚本：片渕須直

原作：こうの史代

音楽：コトリング

声の出演：のん、細谷佳正、稲葉菜月

製作：2016年 日本 カラー 129分